

報告

親子参加型 防災教育イベントを実施して —非常持ち出し袋をつくってみよう～もしもの時、何が必要??～—

伊藤 亜都子
前田 緑

1. はじめに

2014年4月に神戸学院大学では現代社会学部が新設され、現代社会学科と社会防災学科がスタートした。本稿では、社会防災学科の1期生87名のうち学生有志が教員とともに実施した防災教育イベント「非常持ち出し袋をつくってみよう!～もしもの時、何が必要??～」(8月31日(日)、グランフロント大阪ナレッジキャピタルにて)について報告する(資料1)。

神戸市は市内7大学とタッグを組み、グランフロント大阪の中核施設であるナレッジキャピタルにおいて、平成26年度事業として「大学都市KOBE!発信プロジェクト」を展開した。本学もその一貫として「安全・安心—暮らしと健康—」をテーマに常設展示や特別イベントを実施した。本イベントは、学生を中心に各学部の専門性を生かしたコンテンツを発信する『特別イベント(ワークショップ)』として取り組んだものである。

ナレッジキャピタル—The Lab.—は、子どもから大人まで訪れた誰もが触れて、体験して、語り合う楽しい交流施設として位置づけられており、本イベントも聞くだけでなくものづくりの要素を含めたワークショップを企画した。スタッフとして参加した有志10名の学生たちは、大学で学んだ知識を自分たちの言葉で発信できるよう準備に努めた。

神戸市・神戸学院大学
神戸市危機管理室 × 神戸学院大学 『KOBE こども大学』
非常持ち出し袋をつくってみよう!
～もしもの時、何が必要??～
講師:神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 教授 伊藤 亜都子

2014年 8月 31日 (日)
1限目 13時～14時30分
2限目 15時～16時30分
会場:グランフロント大阪 北館 ナレッジキャピタル The Lab. 2Fアキバスタジオ
対象:小学生とその保護者 / 各定員10組 ※必ず、保護者様までご参加ください 参加費:無料

【申込方法】
神戸学院大学 社会連携部までメールにてお申込みください
E-Mail renkei_info@kobe-gakuin.ac.jp (実際のメールアドレス)
※メールに必ず、参加希望時間、お子様と保護者の氏名・住所が、お子様の年齢、電話番号をご記入ください

『大学都市KOBE!発信』プロジェクト
～好奇心を前出す都市と大学～
防災の日 特別企画
神戸市は、全国有数の「大学都市」です。地域の拠点である大学は専門性を集めた神戸市組織機構に
取り組むとともに、様々な分野において行政と連携し、市民の積極的な力によって地域社会を支えています。
近年、自然環境の変化や異常気象など、ご家族が持ち出し袋を準備し様々な変化をきたしています。
今年度は、1995年1月17日に発生した「阪神・淡路大震災」から20年の節目の年を迎えます。震災から経費を
経たれた神戸から「防災」について学んで考えるプログラムを、ナレッジキャピタル The Lab.にて開催します。

神戸市危機管理室 × 神戸学院大学 『KOBE こども大学』
1限目 13時 00分～ 「非常持ち出し袋をつくってみよう!」
～もしもの時、何が必要??～
講師:神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 教授 伊藤 亜都子
2限目 15時 00分～
<授業内容>
① 非常持ち出し袋づくり
② 新聞や段ボールなどを活用したオリジナルグッズづくり
③ 非常食のアレンジ紹介

【イベント予定】
★ 8.18. MON ▶▶ 『夏休み特別企画』アートで遊ぼう! in ナレッジキャピタル
★ 9.15. MON ▶▶ 神戸学院大学 Lab. キックオフイベント
◀ 神戸学院大学 Lab. 9.18.THU ~ START ▶

神戸市危機管理室 × 神戸学院大学 『KOBE こども大学』
非常持ち出し袋をつくってみよう!
【参加方法】
2014年8月28日(木)まで
E-mailにてお申込みください
※E-mailには必ず、参加希望時間、お子様と保護者の氏名・住所が、
お子様の年齢、電話番号を記載してください。
お申込み先・お問い合わせ先
神戸学院大学 社会連携部
TEL 078-974-1348
E-mail renkei_info@kobe-gakuin.ac.jp

【資料1: イベント案内チラシ 左がオモテ、右がウラ】

本イベントを通して、参加者にとってどのような影響を与えることができたのか、また学生にとって今後の学びのステップアップにどのように繋がっているのかについて考察する。

2. イベント内容

イベントの概要は以下の通りである。

(1) 概要

- ①イベント名：非常持ち出し袋をつくってみよう！～もしもの時、何が必要？～
- ②開催日時：2014年8月31日（日）
1 限目：13時～14時30分／2 限目：15時～16時30分
※各回、同じ内容のプログラムを実施。
- ③対象：小学生とその保護者
- ④定員：各回 10組
- ⑤スタッフ：神戸学院大学現代社会学部社会防災学科 1年次生
阿武 妃夏・石橋 尚大・兼石 大地・喜田 悠太郎・合田 七海
田中 瞳・樋口 なつみ・松本 涼平・水谷 収希・光井 一成
社会防災学科 教授 伊藤 亜都子
実習助手 前田 緑

(2) プログラム

当日のプログラムとして、まず①レクチャータイムとしてスタッフの自己紹介と災害時の様子、防災ラリーの進め方について説明し、②防災ラリーを行った。そして最後に、③わが家の防災計画づくりとして自分の家庭に合わせた防災計画について親子で考えてもらった。

① レクチャータイム

ワークショップを始めるにあたり、災害が発生した時にどのような被害が発生したのか、どのような地域の助け合いがあったのかなどについて阪神・淡路大震災や東日本大震災、そしてイベント開催の2週間ほど前に発生した広島土砂災害の事例を中心に説明した。災害が発生した時に一番守るべきもの（一番大切なもの）は命であり、その後安全な場所に避難するということ、いざというときのために日頃から備えることが大切だということを共有した。

② 防災ラリー

防災ラリーでは、体を動かしながら学んでもら



【写真1：レクチャータイムの様子】



【写真2：星型のシールを集める参加者たち】

い、楽しい夏の思い出とともに防災のノウハウを家庭へ持ち帰ってもらいたいという思いから、シールラリー形式で「防災ラリー」を実施し、5つのブースをラリーするという内容とした。

体験したブースごとに星形のシールを集めつつ、体験して作成したものを身に着けながら回ってもらった。

a. 「非常持ち出し袋づくり」ブース

実際にリュックサックにアイテムを詰めながら家庭での備えについて考えてもらうブース(写真3)。参加者の子どもが一人1つリュックサックを選び、その中に10個のアイテムを詰めていく。災害時にあれば便利なもの、必要なものは数多く考えられるがそのすべてを入れることはできない。そこで数を10個と限定して厳選することで、自分と自分の家族にとって本当に必要なものを選んでもらう機会とした。非常持ち出し袋に入れると役に立つだろうアイテムがたくさん用意された中から、多くの子どもたちは食料と水、オリジナルカードを選んでいく。



【写真3：非常持ち出し袋づくりの様子】

オリジナルカードとは、会場に用意されたアイテムの中に自分には必要だというものがない場合に使用するオールマイティーなカードである。1枚あたり1つのアイテムを記入し、リュックサックに投入することができ、多くの子どもたちは「妖怪ウォッチのゲーム」と書いていた。子どもたちが必要とするものの変化を知ることができるカードでもあった。

リュックサックは、店頭で売られているような銀色の袋に非常持ち出し袋と書かれたものもあれば、小学生が校外学習へもっていくようなサイズや、子どもが背負うと大きなものまで様々なサイズを準備した。災害時に自分で背負って逃げるできないものを用意していても仕方がない。いざというときに使えるサイズを選ぶところからの体験学習とした。その中で、「家にあるリュックサックと同じサイズの、これで考えてみない？」と、実際に家庭で既存するものをベースに考えるように子どもへ助言してくれる保護者もいた。子どもたちは、「このサイズじゃ入りきらないよ!」「欲しいアイテムを10個入れたらとても重い…歩けるかな?」「お婆ちゃん、いつもお薬飲んでいるよね?入れてあげたほうがいい?」など、それぞれに感想を口に出しながら親子で考えて取り組んでいた。

【使用したアイテム】

アルファ米・乾パン・ビスコ缶・缶詰おでん・缶詰パン・非常食仕様のパスタ・非常食仕様の餅・非常食仕様の親子丼・リッツ缶・冷えてもおいしいレトルトカレー・レトルトカレー(通常使用)・塩・飲料水(1.5L)・懐中電灯・ラジオ・乾電池・携帯電話の充電器・軍手・ロープ・ラップ・アルミホイル・紙皿・割り箸・スプーン・フォーク・カイロ・フェイスタオル・バスタオル・給水用袋(3L)・アルミブランケット・ジャッキ・着替え(服)・笛・コンタクトレンズ・マスク・常備薬・救急箱・ペットフード(缶詰)・缶切り・簡易トイレ・離乳食・ライター・マッチ・絆創膏・消毒液・哺乳瓶・粉ミルク・ウェットティッシュ・トイレットペーパー・オムツ・オリジナルカード(前述)

b. 「ポリ袋でレインコートづくり」ブース

災害時、レインコートがすぐに手に入らず雨に降られた場合の簡易レインコートの作り方を体験するブース(写真4)。雨除けだけでなく防寒としても使うことができる。形の作り方だけでなく、自分らしさを出し楽しんでもらうために絵つけもしてもらった。用意していたポリ袋が色付きであったため、書いたものが目立たなかったが、参加者はそれぞれに好きなイラストをマジックで描いた。凝りすぎて時間がかかり、次のブースに行けない子どももいた。非常時持ち出し袋にレインコートを備え付けていればこのような作業は不要であるが、いざというときには身近にあるもので乗り越える発想と方法が必要となる。



【写真4：ポリ袋でレインコートづくりの様子】

今後は、レインコートや防寒具以外にも、たとえば調理の時、けがの手当てを行うときの感染防止具としてなど、ポリ袋は様々な場面で役立つ多機能なアイテムであることも盛り込んだブースを考えていきたい。

c. 「新聞紙でスリッパづくり」ブース

災害時だけでなくレジャーでも役立つ、新聞をつかったスリッパづくりのブースである(写真5)。「自宅から避難所に逃げる時もこれで代用できますか?」という質問があったが、実際に被災地の瓦礫の上を歩くにはガラスなどが散らばっており危険であるため、逃げる時は靴や長靴などを着用することを勧めた。子どもたちのなかには、自分用のスリッパを作るだけでなく、親の分も作って手渡している姿も見られた。



【写真5：新聞紙でスリッパづくりの様子】

新聞紙は保温効果もあるため、出来上がったスリッパの中に厚紙を入れ、靴底をつくり避難所で寒さ対策グッズとして使うことができる。今回は、会場内でスリッパに履き替えてもらい防災ラリーに参加していただいた。

d. 「新聞紙で食器づくり」ブース

非常食を備えていても、食べるための道具がなければ食べることができない。食器がない場合のために、新聞紙を使って食器を作るノウハウを学ぶブースを設けた(写真6)。今回は折りやすい紙を使用するために、印刷用紙を包装している紙を再利用して体験してもらった。この包装紙は片面が防水加工されているため、実際に炊き出しで汁



【写真6：新聞紙で食器づくりの様子】

気を含んだものを入れるときにも活用できると準備段階で意見が出されたことも、この紙を使用した理由の一つである。

箱型とコップ型の折り方を主に体験してもらったが、保護者よりも子どもたちの方がすぐに折り方を覚えて次々と作っていた。実際に利用するときは、ラップやビニール袋をかぶせて使うことで、何度も使うことができることを伝え、実際に非常食を入れて試食していただいた。

e. 「非常食試食」ブース

3種類の非常食を試食するブース(写真7)である。非常食と聞くと乾パンを思い浮かべる方が多いが、今回は乾パンだけでなく、江崎グリコ株式会社より協賛いただいた5年保存が可能なビスコと、最近非常食としてよく活用されているリッツの3種類を、作成した食器にサランラップを敷いて試食していただいた。



【写真7：非常食試食の様子】

「災害時、食器の上にラップやビニール袋をかぶせてから、食材をおくと何度も使えるよ!」と声をかけると、子どもたちは自分が作った紙皿をすぐに出して反応してくれたが、保護者の方は少し

遠慮がちで見学されている方が多かった。主役は子どもであるが、一緒に体験していただきたいという思いから、学生が積極的に「ご両親もどうぞ」と声をかけ、体験していただいた。

当初は、アルファ米やカイロで温めたレトルトカレーなどアレンジの紹介を含めて試食していただくことも検討したが、今回は調理なしでも食べられるものだけを準備した。理由としては、火を加えたり切り分けたりなどの作業が必要な試食となると、ラリー形式での開催では会場の設備や衛生管理の問題が出てくるためであり、今後のイベントでの検討課題とした。

③ わが家の防災計画

防災ラリーの全てのブースを体験し、アイテムをすべて身につけた状態で家族写真の撮影をおこなった(写真8)。撮影した写真は、わが家の防災計画シートに添付した。わが家の防災計画シートへ写真を添付することで、今回のイベントに参加した思い出と一緒に、今後の家庭での防災を考えるきっかけとして、防災計画シートを持ち帰っていただけると考えた(写真9)。



【写真8：防災ラリー達成記念写真】



【写真9：わが家の防災計画シートの作成】

今回のイベントでのレクチャーや体験を通して学んだことを加えながら、各家庭に合った防災計画シートを作成していただいた。項目としては、非常持ち出し袋に入れるもの、災害時の具体的な避難場所、家族が一緒にいないときに災害が起きた場合の約束、明日から始めること、などである。多くの参加者は、「わたしの家が非常持ち出し袋に入れる特に大切なもの」という項目を一番熱心に検討されていた。

ある子どもが「アルファ米と、缶詰パン、缶詰おでん、パスタもほしいな!」と今日のイベントで発見した新しい非常食をたくさん入れたいと話していた。すると保護者は、「家で作るときは、あんなにたくさん買えないよ?高いんだから…。値段が高いし、売られている店も限られていますよね?」と現実的な意見を学生に問いかけていた。その際に、「一つの方法として、日頃ご家庭でも食べられているレトルト食品やインスタント食品を入れていただくのもいいですよ。非常食仕様になると消費期限の期間は長いですが、いざというときに期限が切れてしまっている…ということになれば意味がないですから。自分が好きなものを数カ月毎に入れ替えて食べることで、楽しい機会にもなります。」とアドバイスをしたところ、「少し身近に取り組めるかも…!」と家庭で取り組んでもらうきっかけになったようだった。

3. 学生の振り返り

当日スタッフとして参加した学生10名から、今回のイベントに参加してのアンケートを実施した。その中から抜粋した内容は下記のとおりである。

(1) 活動を通して学んだこと・感じたこと

- ・私は非常食ブースを担当した。お皿にサランラップを敷いて食べると貴重な水を(洗うために)使わずにすむこと、普通のビスコも5年間長期保存できる商品があることなど、参加者の方々は興味深く聞いてくださった。普段非常食に触れる機会の少ない参加者の方々にとって、参加してよかったと思える時間をつくるためには「知っておきたい」と思える知識を私たち自身が身につけ伝えることが大切だと感じた。
- ・参加者の中でも、主役である小学生の子ども目線に立って思考するのが難しかった。また、子どもへの接し方については今回の活動を通じて、子どもたちから教えられた。今後の活動では、子どもにしっかりと伝えられる対応に努めたい。
- ・日頃学んでいる知識を、人に伝えることの難しさを感じた。
- ・人に伝えることで、改めて知識を整理するきっかけとなった。

【資料2：わが家の防災計画シート】

- ・参加者の防災意識の高さに驚いた。このような活動を増やし広めていくことで、防災意識をたかめ減災につながると感じた。
- ・私は新聞でスリッパをつくるブースの担当だった。今回のイベントにスタッフとして参加することが決まってから作り方を学んだ。このようなイベントは、参加者だけでなく学生もたくさん学ぶことがあった。
- ・今回の活動を通して、参加者へ新聞紙をつかった紙皿の作り方を伝えることで、自分も作り方をマスターすることができた。参加者が覚えて帰ってくれる姿を見て嬉しかった。

(2) 学生が聞いた参加者の反応や声

- ・非常持ち出し袋を常備している家庭が多かった。「今回のイベントに参加して、もう一回中身を確認しようと思う。」という嬉しい意見を聞くことができた。
- ・「家ではなかなか防災についての話ができていないので、今回のイベントで避難場所の確認などができて良かった。」
- ・「子どもが非常持ち出し袋を考えることがないので、もっといろんな場所で開催してほしい。」
- ・「家に帰ったら、非常持ち出し袋になるカバンを探してみます。」
- ・「非常持ち出し袋を作ろうと思っはいるんですけど中身が決まらなかったり、非常食がやたら高価だったりして…準備しかねています。」
- ・子どもたちが真剣に話を聞いてくれ、スリッパをつくるのに一生懸命になってくれた。子どもたちから「嫌だ」「やりたくない」などの言葉を聞かなかったことに驚いた。

(3) 今後、子どもむけのイベントをする時に気をつけたいこと（今回の反省点）

- ・時間にゆとりを持ったプログラムにする。
- ・小学生たちはシャープペンシルが慣れないようだったので、今後は鉛筆で準備しておきたい。
- ・レクチャーの時の内容は、何かキャラクターを使ってもっと楽しく学べるようなものにすれば、より効果的に感じた。
- ・防災ラリーを全てクリアできたら特典を用意してあげたい。
- ・難しい言葉を、簡単に伝えられるようにする。

(4) 今後、親子参加型の防災教育イベントを企画する際に、やってみたい活動内容

- ・防災ビンゴ。非常持ち出し袋に入れるグッズをたくさん準備し、その中から必要であるだろうというグッズをマスに書いてもらう。準備したグッズからスタッフが選び（すべての人にとって正解というわけではない）、最初にビンゴになった子が非常食の温めなくても食べられるカレー（キャラクターバージョン）や、ビスコなどをプレゼントというような企画してみたい。
- ・まち歩きをして、危険箇所と安全な箇所を探す。
- ・アルミ缶コンロ作り
- ・体を動かしながら学べる、防災〇×クイズを企画してみたい。
- ・避難訓練や消火器の使い方などの体験学習を実施したい。

4. 最後に

親子参加型防災教育は参加した親子にだけでなく、学生にとっても大きな学びの場となると考えられる。

まず、参加者の視点から考えると、「親子」で防災教育イベントに参加することで、より具体的に家庭での備えについて考えることができた。子どもたちは小学校で防災教育を受けているが家庭へ持って帰り実践するためには、親の理解と協力が必要である。学校で家庭での備えが大切だと学び、「非常時持ち出し袋を作ろう!」「家具の補強をしなきゃ!」と呼びかけても、親と一緒に取り組む姿勢がなければ実践できないこともある。親子で一緒に学び、体験することによって今まで後回しにしていたことも、少しでも取り組んでみようと思うきっかけに繋がるという効果が期待できる。さらには、教員や保護者の世代と子どもたちとの間となる若い世代(学生)がイベントを運営することで、子どもも気軽に質問したり、円滑なコミュニケーションをとることができた。

一方、スタッフとして参加した学生にとっても、今回のナレッジキャピタルでの親子参加型防災教育の活動は、有効なアクティブラーニングの場であったと言える。今回のイベントを通して、日頃学習した知識を発信できたこと、できなかったことを感じる事ができた。講義で聞いている言葉をそのまま使って説明すると、保護者には伝わるが子どもには伝わらないことを経験することができた。自分が持っている知識を、いったん自分のなかで再構成し、受け手の年齢に応じて伝えることがいかに大切かを実感することができた。また、今回の経験を活かして新たな防災教育イベントへの発展を目指す学生もいる。

本学の社会防災学科はスタートして1年目であるが、これからの防災教育活動および社会貢献活動への足がかりとなる活動をすることができた。今後も社会防災学科では、試行錯誤を繰り返しながら多様な活動を積み重ね、より充実した活動へとつなげていくことを目指したい。